

## 特集 久保栄没後六〇年記念 「林檎園日記」上演、演出にあたって(その2)

著者	森 一生
雑誌名	Probe : 舞台芸術通信
号	14
ページ	6-14
発行年	2020-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00003342/">http://id.nii.ac.jp/1136/00003342/</a>



# 久保栄没後六〇年記念「林檎園日記」上演、演出にあたって（その二）

北翔大学教育文化学部客員教授

北翔大学北方圏学術情報センター

舞台芸術研究グループ 研究員

森 一生

『たて糸』としての「モニア病」と「遊佐源三郎」の登場

前号では、『林檎園日記』の成立と作品の「本質」に関わる事柄について考察してきた。今号では、作品に込めた作者の《思い》と《内在する》事柄について考察したい。

まず、『林檎園日記』の梗概（あらすじ）について改めて触れたい。

## 一 『林檎園日記』の梗概（あらすじ）

中日事変（昭一七年）のころ、北方の都会の郊外に密集する林檎園（モデルは札幌の平岸）の、開拓以来の旧家安倍林檎園の当主・正義は、主導した新しい栽培法が、家憲を守る母・壽々の反対で容れられず、嫌気がさして家を出、鉾山に手を出したが失敗、大正期に増やした地積を人手に渡すこととなった。

第一幕 早春のある日、安倍家は引越しいにいがしい。園地の名儀書き換えにヤマから下りて登記所に行った正義

を、弟の信胤も親戚の遊佐源三郎も、連れ戻すことができなかつた。その事情を聞いて娘の道子は、私が一緒に行つて帰ってくるというのだが、壽々の、お父さんのそばにいる女の人に睨まれる、という思いがけない言葉に立ちすくむ。

第二幕 開拓当初の官給地だけとなつた安倍家も、今は林檎の花盛り、そこへ、迎えに行つていた信胤がヤマから正義を連れ戻してくる。源三郎を交えてのささやかな祝宴は、道子の研究熱心に釣り出された父正義や源三郎の昔話で賑わうが、話題はやはり安倍家没落の原因に触れてくる。道子は山際の土地と買い換えて積極経営に転じようと懇願するが、官給地だけは手離せぬという祖母壽々に反対されて泣き出す。複雑な感情が胸に迫つて正義は、信胤や源三郎が止めるのも聞かずに、酔つた足取りでヤマに帰るのだった。

第三幕 安倍家の土地を買つた隣の林檎園の息子上田幸彦は、幼い時から道子と婚約しているのだが、家の格差がつきすぎたいま、道子は幸彦に、「もう遊びに来ないで」

という。日照り続きで、農民は雨乞いの太鼓をたたくが、道子の弟継男は、あこがれのヒットラー・ユーゲントとの交歓を雨で台無しにするのか、と怒り、常雇の今朝吉やトメを難詰する。やがて、信胤の文学仲間で、戦死した高須の妹志津子が訪ねて来て兄の手紙を示し、信胤に「懸賞作家になるより無名の大家家になれ」という遺志を伝える。初めのうちは言を濁していた信胤も、高須の誠実な忠告と志津子の愛情のこもった心に動かされ、自分も国策に迎合する精神文化連盟の懸賞応募作を書いていた事実を告白する。卑劣と便乗を打ちのめすように太鼓が鳴り続く……

第四幕 九月半ば、林檎のもぎ取りの最中に、ひよっこり正義が、硫黄ヤママも一段落ついたと偽って帰り、翌、早朝、秘かに登記書類を盗み出そうとして信胤に見つかつた。壽々も道子も、そして源三郎や今朝吉も交えての話し合いの末、壽々と姉弟は今朝吉の故郷（青森）に引き取られ、信胤は遊佐家の常雇いとなつて祖父・安倍百人の伝記を書く決意をする。道子は、やがて今朝吉と結婚することになるだろう。そこに訪ねて来た志津子に晴れ晴れとした信胤は、懸賞作の焼却に立ち会つてほしいと頼む。「これで幾秋、林檎をとつたことになるのかねえ」。壽々のしみじみとした、だが、挫折を越えて新生の緒につく思いを託した言葉を、それぞれがそれぞれに噛みしめながら……

雑駁ではあるがこのように「梗概」をまとめてみた。四

幕、約三時間半を超える大作である。

この大作を物理的な時間の都合から、二時間半程度に「圧縮」しなければならなかつた。

（演出の苦勞はまずここから始まつた。）

二 『林檎園日記』の《たて糸》としての「モニリア病」  
『林檎園日記』は、前述したように、四幕構成であるが、どの幕も、道子の日記の朗読から始まる。

一幕、三月二十二日（火曜日）快晴。

根雪が底どけして地めんまで踏み抜けるやうになり、少しづつ土が見えて来て、氷った川がけふから流れる（略）去年村ぢゆうの林檎園がモニリア病の害を受けたので、雪の来る前に、うちでも信胤を皆さんのさしづで、枯葉一つ残らないように梢を拂つたり落ち葉も一枚一枚はがすやうに掃き集めて、あつちこちで焚火にくべたのを思ひ出す——（以下略）そして

三月二十五日（金曜日）では、

果樹組合で、モニリア病の防除法の講話があるのを、午後、を皆さんの代わりに聞きにゆく。——冬期、土中にせい息した菌が、五月頃、椀状のキノコになつて出て、その胞子が飛んで、はじめは葉に來て、花にも実にもついて腐らかす（華氏）40—50°位（森注 摂氏四・五度から七度くらい）の気温で一番はん殖するので、夏の初めに涼しかったり、ガス（濃霧）があつ

たりすると害が多いので、さうゆうときには焚火をすること。樹勢がおう盛で、樹間距離が適正なら、害が少しでとまると言はれると、うちの旧地面の樹のことが、なほと心配になりながら、帰ってくる。(略)

このように冒頭で「モニリア病」の害と言うことがまず持ち出される。

明治二年、北海道開拓使顧問・ケブロン建言によって北海道における(勿論、札幌・平岸も)果樹栽培が始まる。明治五年、開拓使は、林檎七五種<sup>ななご</sup>の他、梨、ブドウ等を米国から輸入し、全道の移住民に配布した。石狩国札幌郡他二郡、その他、後志、日高、天塩、十勝、釧路、根室、遠くは千島のエトロフ島、——そして、その樹に赤い実がなったのが明治一四年。

しかし、林檎と言うのは病虫害に全く弱い。明治一三年(道南)七重<sup>ななえ</sup>の勸業試験場にカイガラ虫が発生。ちょうど、胡麻<sup>ごま</sup>の実<sup>み</sup>くらいの細長い貝のかたちをした扁平な虫である。——一年に一回だけ産卵する。それが、《幹》《枝》《果実》いたるところに分厚い《垢<sup>あか</sup>》のように《へばりついてたまる》。(そして、それが原因となつて、知らず知らずのうちに《枝は枯死》する。このカイガラ虫の発生で、全道中のりんごは枯れた。

樹木は焼き捨てられた。

明治二十一年に《心喰い》虫。《果肉の中》に喰い込んで

迷路のような糞の路をつくつてしまふ奴。

明治三四、三五年、ふらん(腐乱)病。《幹が腐る》のである。それらの潰滅と戦い、生き残つて、最後に、「モニリア病」。——この「モニリア病」の蔓延というのは、北海道内で、もはや、四、五個所にまで減つたリング栽培地帯への自然への攻撃だった。咲いた花が腐つて緑と乳色に光つた林檎園はみるみる焼野の色に化してしまうのである。

(このように)——「モニリア病」と生活の基盤である「場」(「林檎園」と、そしてその「歴史」(「時間」は無関係ではない。枝が交錯し、繁みあい、夏の炎天下で日陰を作る——そのこと自体が「ふらん病」)「《幹が腐る》原因そのものである。『白い土地の人々』澤田誠一 構想社 三三頁(参照)

二幕の朗読、五月二十四日、道子は、

——もう咲くなと思ううちに、桃や桜や山桜に続いて、林檎の花が咲くまでが、毎年のことでも楽しみに待ち遠しいのだけれど——と語り、

六月六日では、

——今日くらいがもう満開で、うちのは平均して三分咲きほど。乳色に薄紅をぼかした花が五輪つつかたまって咲く梢から、甘酸っぱい匂いがして来て、そこらに一杯になるのを見ると——

と語るが、それは同時に《幹が腐る》原因そのものの現在進行形なのである。

「壽々」（初代園主の娘・二代目園主の妻・安倍家のおばあちゃん）は、二幕後半で

——売った地面は、木と木の間は四間四間の暮の目になってゐるけれど、こっちは三間か三間半でせう。いまさら日当たりや風どほしをよくするために、これだけしかない畑の木を《間伐する》のも冒険だらうしね、——

と言う。

この壽々が言う何気ない、さりげない一言は、のつびきならぬセリフとして、（少なくとも私（森）は《ドキリとさせられた》セリフである。何故なら《間伐する》は《間引きする》ことであり、《間引き》（＝何本かの樹々の《命》を奪うことによって）、園の中の他の樹々に「日の光」と「空気を」取り入れようのである。そしてそれは、直接的には現在と近い未来（ともすると「かなり先の将来」にまで）生活を『賭す』大問題でもあるのである。

このことを、この作品の舞台となっている時代（＝「中日事変」のころ）つまり、「戦時下」に置き換えてみると、「戦争が肯定され、推進されていく」時代の論理、体制・時勢にとって「邪魔なもの・『危険』なもの」と思われる

もの——それらを排除し、（時には《命》を奪い）その犠牲によって、「（現）体制」を守ろうとする思考、態度が浮かんでくるからである。さらに言わせてもらおうなら、このような《内なる病原菌》をそのまま放置し増殖させていいのか——と言う久保の密かな『声』を読み取ることができるといえよう。

つまり、（私たち）一人ひとりの《内なるモニリア病》が問題として提示され、それを問うているともいえるのではないか。

しかもそれを、久保は、久保自身の「歴史観」とか「思想」とかいうものを、かぶせたものとしてではなく、登場人物、道子ばかりでなく、正義、壽々、信胤、そして、源三郎や、今朝吉らの林檎園におけるそれぞれの、実際の生活・実験を《濾過した》「深い、悩ましい《心配ごと》」として語らせ、劇を構築・展開しているといえよう。

澤田誠一氏によると、「たて糸の一本を（モニリア病に）置いた」ところには《盤石の重さ》がある。と言う。（『白い土地の人々』澤田誠一 構想社 三四頁）

この指摘は、演出に当たった私（森）に、大きな《示唆》を与えてくれた。

次に、久保が、演劇創造の過程で役者・演技者にどんなことを「こだわって」求めていたのだろうか、について、私（森）の考えを述べてみたい。

### 三『久保栄演技論講義』に見る久保栄の「こだわり」

『久保栄演技論講義』については前号でも若干触れたが、その最初の講義（一九五六年四月二〇日——上演技は生身の芸術）は、次のような雰囲気で開催された。

『久保栄演技論講義』編集同人代表・山田善晴氏は、（久保栄が研究所に講義に来ると言うことは）「研究所内での《一大事件》として僕の目に映った。講義を受けたのは一期生（勉強会から引き続いて入所した人が含まれていた）、二期生（僕たち編集同人がいた）であった。一期生の中には『五稜郭血書』に出演したり）一度は久保栄と接触を持った人たちがかなりいて劇団事情にも詳しく、その人たちの《一種異様な興奮ぶり》があり、だが《異端者》を迎える時のような、《さけられるならば、さけたいような》態度、そして大部分の劇団員の《表面上は無関心な、だが内心では大変気になるらしい》態度——僕（山田）にはそう感じられた——などから、久保（の）来講をめぐって、《ふと何か冷たく重いものにふれた時の感じのようなもの》がそこにはあった。しかし、それらは底に流れていたものであって、現実には、久保栄を迎える全員の異様な興奮の渦中にそれらはのみ込まれていた。」と言う。（『久保栄演技論講義』影書房 まえがき）

こうした状況の中で、久保は「役と自分との類似を考える基礎は、性格、年齢、職業、生活態度、社会的境遇などです。（略）役者は《自分のなかに役を多面的に思い描か》ねばならず、それには役者の《ふだんの細かい観察に》よって、他人の《印象を》出来るだけ自分の《内部に蓄積し》、また《内的イメージ》として思い出せる修練を積むことが絶対に必要です。《内的視覚像》、《内的聴覚像》を常にやしない、——《現実を見つめ》、耳をすましていろんな職業、性格、年齢の《イメージを豊富にする》こと」（が大事だ。）と言っている。

（同書 一九頁）

また「役者は喜怒哀楽のそれぞれについて、ある《ととのつた型》を覚えてしまてはいけない。——ツギハギ演技、既成の演技は決してしてはならない。——《自分から生み出した》生の動きが生命——役者の生命であり演劇の生命です。」とも言っている。

（同書 二二頁）

また（久保は、小山内薫の言葉を引き）「演技とは、《心の動き》を身体の《動き》で表すこと」と言い、《行動》ではなく《動き》である。「一見論理の裏づけのないように思われる《かんたんな動き》が積み重ねられて（略）一貫した流れを作る」のだ。とも言っている。

（同書 二五頁）

つまり、「概念的ではだめ（で）、頭を概念の寄せ木細工にしてしまてはいけない。《性格も感情も意志も》ゴチャ



ゴチャでいい、例えば言葉にならなくともいい、『つねに生き生きとした存在でいる』こと、『内から湧き起<sup>なま</sup>こつてくるもの』を知ること。(略) 生身の芸術ですから生に感じ表現することが大切だが、(小説Ⅱ文学でいえば)『私小説』であってはいけない。役者には『私小説演技』と言うものは『成り立ちません』。』と言っている。

(同書二頁)

このことは、役者と演技だけではなく、(演劇)創造活動に対する久保の姿勢(こだわり)であり、『林檎園日記』を創作した久保の姿勢としてすこぶる大事なことと言ってもいいだろう。

#### 四、創作プランと上演台本

『林檎園日記』は、現在の上演台本以前にいくつかの創作プランと言われるものがある。

一九四二年(昭和十七年)八月十三日の「日記」には、

創作プラン

林檎園日記(戯曲)

壽々。正道。信胤。まき。継男。幸彦。志津子。定吉。トメ。

正道に関する鉱山試掘のこと。

幸彦に関する石炭液化のこと。

近い上演をめざして中編にするか、遠い上演を期して

長編に仕上げるか?

と言う記述がある。

井上理恵氏によると、「このプランには、かつての『水町林檎園』に含まれていなかった鉱山試掘と石炭液化に関する新たな事項が、要調査事項として記されている。この項目は、既に第二次世界大戦に参戦していた時代背景を映し出すものであって火薬の原料となる硫黄の試掘に関わる正道と、戦闘機のガソリンに転化させるための石炭液化の研究に係る幸彦とを登場させることで、戦時下の社会経済像を描き出そうとする意図が読み取れる。——と指摘する。

登場人物を見よう。(現在の)上演台本(二〇〇四年一月三〇日発行、角川文庫版を復刻拡大したもの)では登場人物、

・壽々。正義。信胤。道子。継男。幸彦。志津子。源三郎。今朝吉。トメ。その他(圏点・傍線は筆者)となっており、「正道」が「正義」に、「まき」が「道子」に、「定吉」が「今朝吉」になっている。そして、「創作プラン」には存在しなかった「源三郎」が存在している。

一人の人物を作品の中に登場させるには「(それなりの)存在理由」がなくてはならない。

またそのことによって、作品の構成そのものの、関係する登場人物の人間像をも変化させる。



また、名前を変更するには「それなりの理由（劇の中における役割の違い、人間像をも変化させる―等）があるのは当然のことである。源三郎の役割を見てみよう。」

源三郎は、安倍家の初代・百人<sup>もんど</sup>とともに、移住した遊佐高秀の孫である。妹・松枝は正義の妻となり、（病弱ながら）道子と継男を生んだ。遊佐の家は、阿部家と同様に「クジを引かずに、一番街よりの、一番便利ないい場所」を《官》から振り当てられた功労者の家であり、この林檎村の《草分け》である。が、

源さん、さふいふがね、早い話がだよ、うちのぢいさんの掘ったモモンド堀をさへ、ヒヤクニン堀と言い換えられるやうな眼に、俺たちの一家は遭つてゐるんだぜ。後から移つてきた人間が、七町歩の十町歩のといふ林檎園を作り上げた中で、草分けからの家柄が、今もつて、このざまなんだ。俺一人が、肩身が狭いんじゃない、お袋に聞いてくれれば、この気持ちはいちばんわかる―

と言う正義の「グチ」ともとれる述懐に続き、源三郎は次の台詞を語る。

そんなこと言いでしたら、正さん、おらなぞは、一体どうするよ。おらなぞは、内のぢいさんがこき

居ついた時の地面さえ手離しちまつてな、いちばん山寄りの悪い土地と買い替えて、そこさ細つこい苗木かなんか植えこんで、あと何年したら、まともな収穫があるもんか分からねえような始末なんどねえかい。まあお情けで、果樹組合の理事やなんかは勤めさせてもらちやいるがな、例えば、春、集まつて人夫の賃金の協定をするにしたつてよ、袋かけ前に、一軒一軒林檎のなりつぷりを視察して歩いて、玉のすぐり方がどうのこうのと指導員らしい口を利いてみたつて、自分の畑のことを考えたら、おらほど恰好のつくやつは、組合中にもなからうもんだ。それでもまあ、こうやつて、しゃあしやあと人の前さ面を晒しているわけだもんな。

―と。

あくまでも過去にこだわりの続け、馴れない事業（「ヤマ」に手を出し、一攫千金を狙う正義と現実を正面から見据え、新たな状況の中で着実に「歩みつつけ」ようとする源三郎の「会話」である。

作者・久保は、『草分けの家』の三代目という同じ条件を二人に与えながら、『二つの異なった生き方』を演じさせることになる。

さらに、源三郎が登場したことによって、正義や安倍家一族の「過去へのこだわり」「守旧性」が一層際立つこととなり、遊佐家の「没落」が当事者である源三郎によつ

て語られることによって、少なくとも、安倍家の没落が、固有な、特別な『事情』によるものではなく、当時の日本の（経済・社会の）「大きな流れ」に否応なく影響されざるを得なかった林檎生産者の「実態」を示し、久保のいう「典型的な諸情勢」を描出することとなっているといえよう。

研究者によると、（一九四二年当時、『林檎園日記』を）花柳章太郎に話しかけ、その後、井上正夫・水谷八重子の「顔合わせの出し物」として企画されていたという。とすれば、『創作プラン・林檎園』は、井上・水谷と言う『新派』の二人が「主人公である演出という構成の作品であった。ということになるのではなからうか。

その後、「源三郎」なる人物を登場させ、作品の構造・構成そのものを変えようとした久保の意図がここからはうかがえるし、演劇作品とはそういうものではなからうかと、私（森）は思う。

さらに、二幕で語る道子の台詞から見よう。

お父さん、わたし後生一生のお願ひがあるんだけど、ぜひ聞いてちょうだい。――

あのね、さっきお父さんが帰ってくる前に、私留守して悪かったけれど、あれはね、遊佐さんとの林檎園の様子を見に行つてゐたのよ。遊佐さんところが、お向かいの地面を工場に売って、一番山寄りの土地と買

い替えたときには、おばあさんじゃないけど、一体どうするかと思つたわ。だけど、あっちの方の安い地面を五町歩買つてね、落葉松なんか、みんな伐つちまつて、熊笹は、雪解けの後に全部焼いて、その灰を鋤きこんでね、林檎の苗木をずうっと植ゑて、間に畝を起して、野菜だの、燕麦だのを作っているのよ。家でもね、どうせこのままだや駄目なんだから、あたし、遊佐さんのまねをして、やっぱり山際の土地と買い替えたいと思ふのよ。焼け灰で加里分が利いて、苗木でも間作のものでも、とても具合がよさそうよ

――お父さん、帰ってきたくなければ来なくてもいいから、ただこの地面を、遊佐さんのところみたいに工場の敷地にでも何にでも売つてしまつて、山際の土地と買い替えるだけ、承知してちょうだい。そこへ苗木を植ゑて、それが大きくなつて実を結ぶまでの間は、わたし、死んだつもりになつて働くわ。お父さんにも、おばあさんにも、をぢさんにも、継男にも、だれにも心配をかけないで、わたし、川西（今朝吉）に手伝つてもらつて、きつとやり抜いて見せますから――

道子の「源三郎・林檎園」の実地から学んだ「自立宣言」ともとれる台詞である。

「まき」から「道子」への変化は、（名前だけでなく）《人格》そのものの変化と言えよう。

もう一つ、看過できないのは、(源三郎が与えた) 信胤の人物像・存在である。

信胤は、作家志望の青年として登場する。彼は、東京の出版社をやめて故郷に戻り、生まれ育った安倍家で働きながら執筆している。没落という現実と直面しながら、「次男坊」という立場からか、どこか「腰が引け」「傍観者的な」存在である。世に出たいばかりに「時局便乗」の戯曲を書くが、友人の手紙に啓発され、自らの行為を恥じ、「無理に世に出ようとせず」《源三郎家から出て来た》「開拓時の資料を基に安倍百人の伝記を書いていこう」と決意する。四幕で、信胤は、

この資料によりますとね、福澤諭吉は、上野の戦争の最中にも、当時、芝の新銭座にあった慶應義塾で、一日も休まずに学問の講義を続けてゐたさうで、その時、塾生に演説をしてですね、オランダと言う国は、本国がどんな眼に遭った間にも、長崎の出島にだけは、いつも間違ひなく国旗を翻してゐた、それと同じで、この慶應義塾は、言へば日本にとつての長崎の出島だ、薩長の野蛮人に江戸を乗っ取られても、ここだけは、学問の伝統を、どういふ戦乱のさなかにも守り続けていかなくちやならない、さういふ演説をしたというのは、うちのぢいさんは、大童信太夫を通じての福澤信者で、薩長の野蛮人が天下をとっちゃ、もう日本

もだめだから、自分たちは北の別天地に新しい長崎の出島を築かうといふやふなつもりで、移住してきたといふんです。

と語る。

信胤にこの資料を提供したのも源三郎で、この提供者がいないとすれば、信胤という人物像はもちろんのこと、作品の構成構造もまた大きく変化したのではないか。

与えられた紙数を大幅に超えてしまったのでここまでとしたい。

が最後に、

「頭を概念の寄せ木細工にしてしまつてはいけぬ。《性格も感情も意志も》ゴチャゴチャでいい。言葉にならなくともいい、《つねに生き生きとした存在である》こと。《内から湧き起ってくるもの》を知ること。生身の芸術ですから生に感じ表現することが大切だ。」——この久保栄の「言葉」を噛みしめつつ次の活動が続けたいと思う。

(一部の旧仮名遣いを現代仮名遣いに変えてあります)